

## 第1回勉強会で出された主な課題・意見等

大分県拠点

日時：令和3年12月20日（月）14：00～16：00

場所：九州農政局大分県拠点会議室

参加者数：30名

（農業者、農業法人、企業（電力、電子工業、林業・緑化）、日本政策金融公庫、生活協同組合、農業団体、自治体、農林水産本省、大分県拠点）

バイオ炭・j-クレジット、耕作放棄地解消、有機農産物の消費拡大 等

### 《バイオ炭の活用、j-クレジット》

- バイオ炭投与の生産者側のメリットは土壌改良ぐらいしかなく、農家にとっては手間だけ増えるということになりかねない。（農業団体）
- 水田作の農業法人ではで大量の籾殻が発生するが、例えば、ライスセンター施設を新たに作る場合に付帯施設としてもみがら燻炭を作るということであれば、強い農業づくり交付金や産地パワーアップ事業が、または既存施設にもみがら燻炭を作る場合には有機関連の補助事業利用が可能と思われるが、小規模（個人ごとの簡易な施設）な燻炭施設では助成は難しい。（農林水産本省）
- バイオ炭だけでは消費者への訴求力が少ない。有機農業などとセットで環境に優しい農産物として消費者に周知していくことが必要。（農林水産本省）
- 伐採されたままになっている山林や反対に伐採されずに放置された山林が多い。間伐材を炭にして農地ではなく山林に投入することもj-クレジットの対象とすべきではないか。（農業者）

### 《耕作放棄地解消の取組に当たって》

- さとうきび栽培の労働力として「私たちのふるさとの再生を支援する会」ボランティア等の支援で労力を確保しているが、タイミングよく労力が確保できれば栽培面積の拡大が可能になるが、支援してもらえるタイミングが合わないこともあり栽培面積の増加には至っていない。（農業者）
- 当方の地域は昔から良質米の産地だが、耕作放棄地が増えている現状。無農薬・無化学栽培米に取り組んでいる。また、里山の再生に向け、集落において手間がかからない作物として耕作放棄地に「マコモ（縄文時代から食されてきたもの）」を試験栽培し、祖母山麓エリア等をブランディング化して魅力を発信していこうとするプロジェクト立ち上げ、高い評判があった。  
竹田市への移住者の中には、自給的なコメ作りをしたい者もいるが、水田の確保や農機具調達等の問題もありハードルが高い。このため、移住者が自給的に米作りする支援として「貸し水田」制度を導入したい。貸し側、借り側双方にメリットがある取組だと思料。①圃場条件のよい場所（法人が作付）、②普通の圃場（貸水

田)、③機械も入らない条件の悪い圃場(マコモ栽培)の3本立てでやれば、新規就農者や耕作放棄地等の課題解決にも繋がるのではないか。(農業者)

#### 《有機農産物の消費拡大》

○臼杵市「ほんまもん農産物」の取組は、臼杵市民、大分市民には知られるようになったが、消費拡大にはまだまだ知名度アップが必要。(自治体)

○地域が持つ自然環境や食文化と合わせてブランディングし情報発信していくことも必要。

有機農業は少量多品目、宅配が主な物流手段であり、慣行栽培より労力がかかり単収があがらず高価格設定にならざるを得ない。ヨーロッパでは環境に対する意識が高く、少し高くても環境にいいものならと購入するが、日本では美味しい、身体にいいもの、低価格のニーズが主流であり、行動の「下地」がないと消費拡大は難しい。(自治体)

○土づくりに力を入れ収量が上げることが当面の課題。慣行栽培の収量に近づくことができれば価格差も縮めることができる。(大分県拠点)

○臼杵市では以前から学校給食に地元の有機米を利用している。地産地消の取組も有機農産物の普及に有効である。(自治体)

#### 《大分県拠点あいさつ》

○この勉強会の趣旨は、いろんな方に来ていただいてご意見を聞く、その中で集まっていた皆さんにいろいろな気づきを持って帰っていただく場になればというもの。次回もそういう場になるよう計画したい。

(以上)